

『赤い鳥』の童話作品における一人称代名詞

— 鈴木三重吉を中心に —

山田実樹

(2012年10月2日受理)

First Personal Pronouns in Children's Stories Appeared in *Akai-Tori*:
With a Focus on Miekichi Suzuki

Miki Yamada

Abstract: This study attempts to examine first personal pronouns found within children's stories that appear in *Akai-Tori* with a primary focus on Miekichi Suzuki. *Akai-Tori* a magazine for children, first published in 1918 by Suzuki is recognized as the origin of all modern Japanese children literature. This research was conducted on children's stories found in copies of *Akai-Tori* printed between 1918-1929, focusing on stories written by 15 selected authors. The results are as follows: 1) *Akai-tori* uses 14 forms of first personal pronouns that occurred 3719 times throughout the texts. 2) Suzuki uses more forms of first personal pronouns than other authors. 3) Suzuki uses *boku* solely referring to male children, while other authors use it to address male children and adults. 4) Occurrences of *oira* and *ora* are rare, and non-existent in Suzuki's writings. Finally results indicate that through his varied use of first personal pronouns, Suzuki succeeded in creating defined character boundaries, and that *Akai-Tori* perhaps contributed to the establishment of modern Japanese usage of first personal pronouns.

Key words: *Akai-tori*, First Personal Pronouns, Miekichi Suzuki, children's literature

キーワード：赤い鳥，一人称代名詞，鈴木三重吉，児童文学

1 問題の所在と本稿の目的

『赤い鳥』は、大正7/1918年に鈴木三重吉主宰で創刊された子供向けの雑誌であり、昭和11/1936年までの18年間に渡って196冊刊行されている。『赤い鳥』が創刊された時期は、国定教科書の刊行から14年後のことであり、その受容期は標準語が定着しつつある時期と重なっている。また『赤い鳥』は児童文学の祖ともされており、現在の児童文学の文体は、この雑誌から

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：小西いずみ（主任指導教員）、佐々木勇、白川博之、山元隆春

始まったと考えられる。このように、刊行された時期からみて、非常に重要な近代語の資料である『赤い鳥』は、綴り方教育の資料としては注目され研究されているが、その主要部分である文芸作品を対象とした言語資料としての調査・考察はあまり行われていない。

『赤い鳥』は、鈴木三重吉を中心とした複数の作家による、童話や童謡、少年少女劇のシナリオ等ジャンルの違う作品によって構成されており、その語彙、文法、文体を明らかにすることが可能である。また、それらの作家の作品によって形づくられた児童文学の文体という観点からも、調査・考察をなすうる。

『赤い鳥』は、大正期の児童文学における書き言葉の資料であり、たとえ会話文であっても、当時の話し言葉がそのまま反映されているとはいえない。しかし、

『赤い鳥』は、創刊号の標榜語に書かれている鈴木三重吉の「子供のために手本となる良い雑誌を作りたい」という理念が反映された雑誌である。『赤い鳥』は教育現場を中心に広く受容され、鈴木を始め作家たちは、ある種の言語選定意識を持って作品を執筆していたと考えられる。したがって、『赤い鳥』の作品には当時社会の中である程度共有されていた語彙、文法、文体と、鈴木ら作家によって子供たちが学ぶべき手本として新しく作られたものが反映されており、『赤い鳥』によってなんらかの指針が示され、それを読者が受容し、再生産していたと考えられる。

本稿で取り上げる一人称代名詞は、バリエーションが豊富で、性差や年齢、社会階層等の属性によって使い分けられるという点で、日本語に特徴的なものである。特に書き言葉ではデフォルメされて、実際の話し言葉からは乖離した使用がなされることがあり、金水(2003)が述べるように、役割語の一端を担っている。

一人称代名詞は、その使用がある程度慣習化しているが、文芸作品等の書き言葉資料では大量に使用されており、一見その特徴がみえにくいために、あまり注目されていない。先行研究によって、『赤い鳥』以前の江戸・明治時代については調査がなされているが、国定教科書によって標準語が制定されてから後の資料については、あまり調査されていない。

『赤い鳥』では当時の一人称代名詞の使用状況を受けて、それを踏襲している部分と、新たに創造した部分があるはずである。どの一人称代名詞を使用するかによって、登場人物のキャラクターは位置づけられ、子供たちは『赤い鳥』の作品を通して一人称代名詞とキャラクターの結びつきを受容し、学んだであろう。

こうした問題意識に立った上で、本稿では、『赤い鳥』の主要作家の童話作品において、どのような一人称代名詞がどのように使用されているかを調査し、鈴木三重吉を中心に考察することを目的とする。

拙稿(2012)では、鈴木三重吉の童話作品における一人称代名詞について、『赤い鳥』を資料として調査を行った。その際に現代共通語と比べてボクの使用に特徴があることや、オイラ・オラの形式が使用されていないこと等が明らかになったが、比較対象とする他作家の用例がなく、十分な考察には至らなかった。

『赤い鳥』は鈴木三重吉主宰の雑誌であり、鈴木自身が多くの作品を執筆しただけでなく、他の作家の作品に対しても大きな影響を与えたと考えられる。『赤い鳥』の童話作品において鈴木が一人称代名詞をどのように使用し、それが他の作家と比べてどのように一致し、また異なるのかを調査・考察することは、鈴木三重吉の特徴を明らかにするだけでなく、『赤い鳥』

という雑誌の文体、さらには児童文学の文体を明らかにすることにつながる。

2 先行研究

本稿では、小松(1987,2000,2008)、飛田(1974)、祁(2007)、長崎(2007)、加藤(1981)、山西・山田(2008)、金水(2003,2007)を取り上げる¹⁾。なお、取り上げる先行研究は江戸後期から現代に限り、話し言葉それ自体は問題としていない。

小松(1987)は、『浮世風呂』を資料として、階層が女性の使用する一人称代名詞にどのような影響を与えるかについて調査・考察している。『浮世風呂』は銭湯に集まる江戸庶民の会話を基に構成されており、当時の話し言葉を反映した資料とみなされている。小松は女性の階層と使用する形式との関わりについて、以下のように明らかにしている。

〈上層女性〉

- ・ワタクシとワタシを目上及び対等、または話し手より若い人の場合に使用する。
- ・ワタシは成人女性は目下に対して、子供は対等関係で使用する。

上層のワタクシは使用範囲が広く、対等関係ばかりでなく、年齢的な目上、目下にもこれを用いる。

〈下層女性〉

- ・オレ・オラ・オイラ・コチト・コチトラ・ワッチ・ワタシ・ワタクシを使用する。
- ・ワタクシ・ワタシは目上に対して、オレは目下に対して、それ以外の形式は対等の場合に使用される。特に公の場では下層女性もワタクシを使用している。上層と下層を比較した場合に、上層では目上と対等の聞き手に、下層では対等と目下の聞き手にそれぞれ同じ一人称代名詞を使用する。

〈中層女性〉

- ・中ノ上では、ワタクシのみが使用され上層にほぼ等しく、中ノ下では対等の場合にはワタシ・オラ・コチトを使用する。ワタクシが含まれている点が下層女性と異なる。

また小松(2000)では、女性の一人称代名詞が江戸語から東京語へどのように変化したかについて調査し、以下のように述べている。

- ・オレ系の一人称代名詞は、前期上方語では上層の女性も使用していたが、化政期の江戸語では使用なくなり、東京語ではほとんど消えてしまった。
- ・ワッチは江戸語では話し手に偏りがあり、性差はなく男女共に用いたが、女性は玄人筋の女性が多く用い、この傾向は明治に入ってもみられた。

さらに小松（2008）は、『浮世風呂』における男の一人称と階層の関係と階層による男女差について以下のように示している。

- ・男性の場合階層による大きな差がない。しかしワッチを下層だけが使用する，ワタクシは下層と非下層の間で用法が異なる等の差異はみられる。
- ・成人上層男女を比較すると，男の方が特に目下に対して，一人称の種類が豊富である。男はオレ，オラ，ワシを使用するが上層女性は使用しない。
- ・未成年男女では，男の子は階層に関係なくオイラを主としてオレを交えて使用するが，女の子は階層による使い分けがある。

小松は，上下関係だけでなく，どの階層に属している人物がどの形式を使用しているかについても述べている点に特徴がある。

飛田（1974）は、『安愚楽鍋』を資料として，一人称代名詞の待遇変換形式について調査・考察している。『安愚楽鍋』は明治4～5年に刊行された，牛鍋屋に集まる庶民の会話を基にした滑稽小説であり，当時の話し言葉が反映された資料とされている。

飛田は『安愚楽鍋』で使用されている一人称代名詞を和語のわたくし・わちき（わちきち・わちきども）・わつち（わつちども）・われ（われわれ）・おれ（おれたち）・おいら・おら・こちとら，漢語の僕・拙・愚老（愚老ら），混種語のわが輩に分類し，形式ごとに述べている。

- ・「わたくし」は目下から目上に対して使用され，敬意のある形式である。
- ・「おいら」「僕」は対等，あるいは目上から目下に対して使用される。「僕」は男性が用いていて，敬意ではなく話し手の有り様²⁾を示している。
- ・「わちき」「わつち」は目下から目上，目上から目下の両方で使用される。共に中立的立場の語である。

飛田は，語種からみると，和語は男女とも使用し，漢語と混種語は男性のみが使用しているが，町人・職人のグループは漢語の形式を使用しておらず，これには教養の有無が関係するとしている。

祁（2007）は，明治初期～末期における23編の文芸作品の会話文に用いられた一人称代名詞を調査し，その位相と待遇価値との関係を明らかにしている。調査対象の文芸作品には，同じ明治期であっても滑稽小説や戯作等話し言葉の反映性が高いものから，小説のように会話文であっても再構成され，話し言葉をそのまま反映しているとはいえない資料の両方が含まれているが，これらの資料の位置づけについては言及されていない。祁は明治時代語における一人称代名詞について以下のように述べている。

- ・ワシは男女共に用いる一般的な一人称代名詞であるが，女性の方が男性よりはるかに多く使用する。
- ・アタシは女性が使用し，中でも上層町人の使用が全体の8割を占めている。
- ・ワシは女性より男性の使用数が圧倒的に多い。男性では官員層と町人を中心に全階層に用いられており，女性では官員層と上層・下層町人で少数用いられている。
- ・ボクは男性において知識層を中心に幅広く用いられている。
- ・オイラは全階層の男性が用いているが，下層町人の使用が全体の6割と多い。
- ・オラは下層町人の使用が全体の9割を占め，オイラと共に下層の人物が使用している。

長崎（2007）は，滑稽本や小説等の資料を用いて，明治以前，明治以降，女性によるボクの使用の三点から，以下のように述べている。

- ・江戸時代ではへりくだった表現として使用され，明治初期では武士や文人等の教養層が使用した。
- ・男性同士では早い時期からその使用が一般化され，同等あるいは目上から目下に対して使用された。
- ・明治初期は，女学生がボクを使用することに大きな批判があった。したがって，明治前期では限られた人物，限られた場面のみであったが，明治半ば以降に一般的に使用されるようになった。

また小松（1998）は人情斬や小説を資料として江戸東京語におけるキミとボクの対使用について調査し，ボクが江戸末期には幫間医者，武士，教養層の間ですぐに対等関係で使用され，明治20年代以降，知識層，書生から少年へとその使用が広まったとしている。

加藤（1981）も，主に明治期の小説を資料として，明治20年代に中流以上の少年がボクを使用するようになるが，下町や職人，農家の子供の使用はみられず，明治30年以降丁寧な言葉と共に，目上や初対面の人に対しても使用されるようになったとしている。

しかし昭和27年に文化庁が示した「これからの敬語」は，ボクは男子学生の用語であって，社会人になればワシを使うよう教育上注意する必要があるとしており，この間にその用い方に変化があったことがわかる。長崎（2007），小松（1998），加藤（1981）からは，ボクが江戸時代末期から男性知識層で使用されるようになり，その後書生等青年層の使用を経て，明治20年代以降その使用範囲が拡大していったことがわかる。

金水（2007）は，役割語の観点から一人称代名詞を捉え，実際の発話に関わらず今日では役割語として広く日本人に共有され，様々な作品に利用されていることを指摘し，それぞれの形式について以下のように述

べている。

- ・「わし」は老人語・博士語でよく使用される。老人語の「わし」は18世紀後半～19世紀にかけての江戸語にそのルーツがあり、近代に近づくにつれて博士語としても用いられるようになった。
- ・「ぼく」「おれ」は男性専用語である。江戸時代の武家ことばから書生ことばを経て、現在の男性専用語として用いられるようになった。
- ・「わたし」は女性は場面に関わらず使用し、男性も公的な場面では使用する。
- ・「あたし」は女性が私的な場面で使用する。
- ・「おいら」「あし」は役割語度が高く、社会階層が低い田舎者が使用する語として位置づけられている。

山西・山田(2008)は、小説の用例を基にアタシの史の変遷を概観し、J-POPの歌詞を用いてアタシの位置づけについて以下のように考察している。

- ・「わたくし」は職業上の謙虚さや社会的に注目されているというある意味で相反するかのような自意識の表れである。
- ・「わたし」は一般的に使用される形式である。
- ・「あたし」は男性が使用する場合には、落語家や下町の職人等特定の職業に従事している者に限られる。女性の使用では、幼さ/素直さ/なれなれしさを表現し、特にJ-POPの歌詞では「甘え、かわいらしさ、親近感、感情の吐露」等のイメージを持つ。

山西・山田では、「実際の言語生活や世相を反映するもの」としてJ-POPの歌詞を取り上げ、現代語の一人称代名詞について考察しており、それぞれの形式が持つイメージや規範について取り上げようとしている点で、他の論と異なるといえる。

3 研究の方法

本研究では、『赤い鳥』第一期(1918～1929年)22巻127冊の主要作家による童話作品を対象に、一人称代名詞について調査する。対象とする作家は以下の通りである。

芥川龍之介(話数4, 作品数3以下同様)³⁾、有馬生馬(5, 5)、有島武郎(1, 1)、宇野浩二(36, 28)、小川未明(41, 41)、小山内薫(9, 6)、小宮豊隆(3, 3)、島崎藤村(5, 5)、鈴木三重吉(173, 106)、高浜虚子(2, 1)、谷崎潤一郎(1, 1)、徳田秋声(2, 2)、野上豊一郎(8, 6)、野上弥生子(9, 5)、森田草平(8, 5)

作家は、主宰者の鈴木三重吉を始め、執筆作品数の

多い者、また創刊号の鈴木三重吉の言葉などを参考に、『赤い鳥』において主要な者を選定した。

また、表記と漢字のルビから語形を認定した。ルビ欠如等で語形が認定できない用例はみられなかった⁴⁾。形式ごとの表記はさまざまだが、一つの作品中でもその表記は揺れており統一性がないことから、表記の別を問題としないこととした。

本稿では一人称代名詞が多様なバリエーションを持つことに着目し、それらが『赤い鳥』の童話作品においてどのように使い分けられているかを明らかにすることを目的としている。したがって、それ以外の自称詞的に用いられる親族名詞や職業名等は、本稿では扱わないこととした。

収集した用例は人・人以外の有情物・その他、性別、社会階層に分類し、考察した。

4 調査結果

4-1 用例数全体の概要

調査の結果、14形式の使用が確認された。用例総数は3719例であった。以下に『赤い鳥』にみられた形式を推定される語形変化の順に示す。

ワタクシ系

ワタクシ(一タチ・ードモ)

→ワタシ(一タチ・ードモ)→ワッシ

→ワシ(一タチ・ーラ)

→アタクシ→アタシ(一タチ・ードモ)→アタチ

オレ系

オレ(一タチ、ーラ)

→オイラ→オラ

その他

ボク(一タチ、ーラ)、ヨ、ワレ(ーラ)、ワレワレ

ワタシタチのような単数形に複数を表す接尾辞で構成されている形式は単数形にまとめて扱う。ただし、ワレワレはタチ・ラのような複数を表す接尾辞からなる複数形とは異なるとみなして、ワレとは区別した。

作家ごとの使用数を示した表1⁵⁾をみると、ワタシの用例数が最も多く、どの作家においても高い割合で使用されている。

また、ワタクシ、ワシ、オレも使用する作家の多い形式である。全体としてボクよりもオレの方が用例数が多く、両形式を使用している作家の場合でも同様の傾向がみられる。特に鈴木三重吉ではオレはボクの5

倍使用されており特徴的である。

用例数の少ない形式に目を向けると、鈴木三重吉が他の作家とは異なる形式を多く使用し、そのバリエーションが豊富であることがわかる。アタクシ、アタチ、ワッシ、ヨ、ワレは鈴木のみが使用している形式である。その他に、宇野浩二がオイラを、森田草平がオラをそれぞれ使用しており、これらの形式もそれ以外の作家では使用されておらず、特徴的である。

また、特に鈴木三重吉では、地の文で使用されている一人称代名詞が少ない。これは、鈴木三吉の作品では一人称の語りが少ないことの反映である。

鈴木三重吉が他の作家とは異なる一人称代名詞の使用をみせていることや、この雑誌の主宰者であること、さらに執筆作品数の多さ等を考慮し、本稿では鈴木三重吉を中心にしながら、適宜その他の作家の用例についても述べていくこととする。

次に、登場人物を人と人以外の有情物（猫、魚、蠅等）、その他に分け、それをさらに男女に分類した⁶⁾表2を示す。鈴木以外の作家を「その他の作家」とまとめた。「人」には神や人喰鬼等、「その他」にはコスモスやモミの木等の植物や机、手桶、玩具等の物が含まれている。「人以外の有情物」も「その他」も擬人化され、それぞれの一人称代名詞によってキャラクター付けされている。

話し手の属性に着目すると、人・男の用例数が圧倒的に多く、全体の半数以上を占めている。しかし鈴木三重吉では、人以外の有情物は女性の使用が多い。

形式と性別の関わりをみると、オレ、ボクは性別が不明なものを除いて全て男性が使用しており、アタクシ、アタチも女性が使用していることから、これらの形式は性別によって使い分けがなされているといえる。しかしアタシは、女性の使用数が多いが、若干ながら男性の使用もみられるという点で、アタクシ、アタチとは異なっている。また、ワシは女性の使用も若干みられるが、やはり男性が主として使用し、同系の

ワッシも男性のみが使用している。

さらに、それぞれの用例の話し手を、人と人以外の有情物、その他の階層ごとに「上・中・下」と分類した表3を示す。人では、「上」に神や王、お金持ち等社会階層の高い人物、「下」に乞食や貧乏人、百姓等社会階層の低い人物、そのどちらにも当てはまらず特に描写のない人物を「中」として分類した。人以外の有情物は「上」に人と同様に社会階層の高いものを、「下」に社会階層の低いもの、さらに物語の中で害をなす等悪く書かれているものも含め、特に記述のないものについては「中」とした。

4-2 形式ごとの用例とその特徴

形式ごとに、用例と併せて述べていく。

〈ワタクシ〉

- (1) 「お父さま／＼、私（わたくし）をあのゼメリイさんのお嫁にして下さいませ。」(2-1「ゼメリイの馬鹿」王女→王)⁷⁾
- (2) 「私（わたくし）は何にもいたゞくわけはございません。」と言いました。(11-3「こしかけと手桶」貧乏だが人のいいお爺さん→王様)

ワタクシは、鈴木三重吉、その他の作家共に社会階層の高い者の使用が多く、その指標となっている。(2)のように、話し手の社会階層が中以下の場合には、身分の高い者に話しかける場面において使用されているが、(1)のように王女であっても聞き手は王であり、基本的に話し手より位が上の者が聞き手となっている。植物や物等の使用はみられず、全て人または人以外の有情物の使用であった。

〈ワタシ〉

- (3) 「そんな籠や鶏は私（わたし）の籠や鶏ではない。」(9-1「ぶつ／＼屋」聖者→ぶつ／＼屋)
- (4) 「私（わたし）は今までうっかりして、あの有り難い予言者のことを忘れてみた。」(1-6「またぼ

() は%、「地」は地の文、「会」は会話文を指す。

表1 作家ごとの使用数

	ワタクシ		アタクシ		ワタシ		アタシ		アタチ		ワッシ		ワシ		オレ		オイラ		オラ		ボク		ヨ		ワレ		ワレレ		総計
	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会			
鈴木	1 (0.05)	195 (9)	1 (0.05)	43 (2)	619 (29)	292 (14)	7 (0.3)	8 (0.4)	263 (12)						435 (21)							86 (4)	15 (1)	1 (0.05)	8 (0.4)	3 (0.1)	144 (7)	2121	
宇野	3 (1)	10 (2)		23 (4)	180 (33)				118 (22)	1 (0.2)	47 (9)	6 (1)		104 (19)	55 (10)												1 (0.2)	548	
小川		8 (2)			263 (81)	2 (1)			7 (2)		31 (10)				12 (4)													323	
芥川	63 (41)	10 (7)			26 (17)	1 (1)			22 (14)		16 (10)			3 (2)	10 (7)										1 (0.7)	1 (1)	153		
森田		32 (25)		1 (1)	29 (23)				28 (22)		30 (24)			5 (4)	2 (2)													127	
有島武		4 (4)													97 (95)	1 (1)												102	
小山内		3 (4)			9 (11)	8 (10)			15 (18)		30 (37)				17 (21)													82	
野上弥	27 (37)	11 (15)		5 (7)	15 (21)				1 (1)		11 (15)				3 (4)													73	
有島生				14 (25)	16 (29)				6 (11)						20 (36)													56	
野上豊		14 (28)			13 (26)	1 (2)			8 (16)		10 (20)																4 (8)	50	
島崎				17 (55)	12 (39)										2 (6)													31	
徳田		13 (68)			3 (16)				1 (5)		2 (11)																	19	
高濱		5 (29)			6 (35)				4 (23)		2 (12)																	17	
谷崎		1 (10)			2 (20)	6 (60)			1 (10)																			10	
小宮					4 (57)										3 (43)													7	
統計	94	306	1	103	1197	310	7	8	474	1	614	6	5	204	211	15	1	8	4	150								3719	

表2 鈴木三重吉とその他の作家の話者属性別使用数1⁸⁾

()は%

		話者総数	ワタクシ	アタクシ	ワタシ	アタシ	アタチ	ワッシ	ワシ	オレ	オイラ	オラ	ボク	ヨ	ワレ	ワレワレ	総計
鈴木三重吉	人・男	210	101 (8)		391 (31)	2 (0.2)		8 (1)	199 (16)	335 (26)			81 (6)	15 (1)	7 (0.6)	128 (10)	1267
	人・女	53	37 (10)	1 (0.3)	89 (23)	243 (63)	1 (0.3)		10 (3)							3 (0.8)	384
	人・不明	24	15 (25)		18 (29)				7 (11)	7 (11)					2 (3)	12 (20)	61
	有情物・男	30			19 (28)				16 (24)	28 (41)			5 (7)				68
	有情物・女	24	23 (26)		12 (13)	45 (50)	6 (7)		4 (4)								90
	有情物・不明	55	20 (12)		100 (58)				11 (6)	39 (23)						1 (0.6)	171
	その他	17		33 (41)	2 (3)				16 (20)	26 (33)						3 (4)	80
その他の作家	人・男	171	130 (15)		253 (28)				153 (17)	143 (16)	2 (0.2)	5 (1)	202 (23)			3 (0.3)	891
	人・女	53	29 (13)		146 (68)	10 (5)			30 (14)								215
	人・不明	33	34 (26)		66 (50)				21 (16)	4 (3)	4 (3)	1 (0.8)			1 (0.8)	131	
	有情物・男	11	10 (7)		4 (3)	8 (6)			10 (7)			109 (77)					141
	有情物・女	2			5 (100)												5
	有情物・不明	34	1 (1)		82 (78)				7 (7)	12 (11)						3 (3)	105
	その他	26			82 (75)				11 (10)				17 (15)				110

表3 鈴木三重吉とその他の作家の話者属性別使用数2

		ワタクシ	アタクシ	ワタシ	アタシ	アタチ	ワッシ	ワシ	オレ	オイラ	オラ	ボク	ヨ	ワレ	ワレワレ	
鈴木三重吉	人・男	上	66		200	1			100	180			21	15	1	118
		中	19		125	1		1	47	59			60		6	5
	下	16		66			7	52	96						5	
	人・女	上	25	1	56	46			2							
		中	2		12	177	1									
	下	10		21	20			8							3	
	人・不明	上	14		9				2							4
		中	1		8				5						2	8
	下			1					7							
	有情物・男	上							2	8						
		中			14				11	12			3			
	下			5				3	8				2			
	有情物・女	上	21		6	5										
		中	2		6	40	6									
下			6					4								
有情物・不明	上			2					3							
	中	17		91				9	31						1	
下	3		7					2	5							
その他	上			1					22						3	
	中			32	2			16	4							
その他の作家	人・男	上	93		158				85	61			166			2
		中	16		72				18	41			29			
	下	21		23				50	41	2		5	7		1	
	人・女	上	15		64	1			1							
		中			53	3			2							
	下	14		29	6			27								
	人・不明	上			18				15							
		中	33		47				4	3	4		1			
	下	1		1				2	1						1	
	有情物・男	上														
		中	10		3	8				9			5			
	下			1								104				
	有情物・女	上			1											
		中			4											
有情物・不明	上			23				7	2						1	
	中	1		59					10						2	
その他	上			16												
	中			66					11			17				

あ (下)王→家来)

(5)「御覧なさい、これですよ、私(わたし)が嘸んでふとりましたのは。」(12-4字野「ちゅう助の手柄」野鼠のちゅう助→狐太郎)

(6)「私(わたし)の母さんはいゝ人です。」(14-3「乞食の王子」トム(乞食の子)→王子)

ワタシは(3)~(6)のように、社会階層の上下や人、人以外の有情物に関係なく様々な登場人物に使用されている。このように幅広く使用される形式であること

が、他の形式と比べて使用数が多い理由であろう。一方で、鈴木三重吉では男女共に、その他の作家では男性において、社会階層の高い人物が多く使用する形式でもあり、丁寧さも結びついている。また、(3)の人物はワシを、(4)の人物はオレを併用しており、ワタシは他の形式と併用されやすいといえる。

〈アタクシ・アタシ・アタチ〉

(7)「こんな私(あたし)でも、よろしうございませば、どうぞお伴れになつて下さいまし。」(1-2

「ぶく／＼長々火の目小僧」王女→王子)

- (8) 「私 (あたし)、もう、こんなにして泳いで廻るのはいやになつたわ。ね、鼠ちやん。」(7-3「地中の世界」すゞ子ちゃん→二十日鼠)
- (9) 「狼さん。あたしはきつと復帰つて参ります。」(1-2小山内「正直もの」兎→狼)
- (10) 「おぢいちやま、あれは私 (あたち) が乗ん／＼するの?」(11-3「こしかけと手桶」女の子→お爺さん)

アタクシは、鈴木三吉の作品で (7) の一例のみ使用されている。この王女は他にアタシとワタクシを使用しているが、後者の形式を最も多く使用しており、アタクシもワタクシと同様、社会階層の高いことを示している。鈴木三吉はアンデルセンやエクトール・マロ等の作品を底本とした童話を多く執筆しており、それらの作品は中世ヨーロッパを想定したと思われる架空の世界が舞台となっている。この形式はそのような舞台に登場する社会階層の高い女性の使用と結びついていると考えられる。

アタシは鈴木三吉では (8) のように少女を中心におばあさん、おかみさん等の女性のみが使用しており、その使用率がその他の作家に比べて高い。その他の作家では (9) のように、小山内薫の作品でオスの兎が使用しており、この作品のみ女性の使用でない。金水 (2007)、山西・山田 (2008) が述べるように、アタシは女性が主に使用する形式として、語形と性別が強く結びついている。オレを使用する狼とアタシを使用する兎は、男性性と女性性をそれぞれ付され、「女性は男性より優しい」という前提によって、優しい性格の兎がアタシを使用していると考えられる。

現代共通語でのアタクシ、アタシの位置づけを国語辞典を例にみると、『明鏡国語辞典』第二版 (2010)、『新明解国語辞典』第六版 (2005) ではアタクシは、「わたくしのくだけた言い方」「あたしよりは丁寧で、多く女性が使う」とある。アタシも同様にワタクシのくだけたもので、主として女性が使うとされている。鈴木三吉の作品中で、アタクシが1例しか使用されておらず、中層の女性のアタシの使用数が多いのは、この時期から既に現代と同様の使い分けの意識があり、アタクシ・アタシが共にワタクシ・ワタクシよりもくだけた言い方であり、山田・山西 (2008) のいうアタシの持つ「幼さ/素直さ/なれなれしさ」というイメージが、少女の幼さや素直さ、おばあさんやおかみさんのなれなれしさといった点で、鈴木三吉の描くこの階層のキャラクターと一致したからではないか。

アタチは幼児語の特徴であるシとチの交代が起こっ

ており、(10) のように幼い女の子が使用する一人称代名詞として位置づけられている。しかしこれが実際の幼児語を反映しているかは疑問であり、「シとチの交代が起こりやすい」という幼児の発話の特徴を強調することで、役割語として用いられているといえるだろう。アタクシ、アタシもワタクシ、ワタクシも交替可能であり、これらの形式を用いることによってそれぞれの階層に属する女性であるということが示されている。

〈ワッシ〉

- (11) 「わッシの叔母は、わッシにやアおふくろも同じことです。」(12-5「ディーサとモティ」象使い(土人)→雇主)

ワッシは鈴木三吉のみにみられる形式で、場末の酒場の主人と象使い(土人)が使用している。共に社会階層の低い男性で、場末の酒場の主人はオレの使用が最も多くワタクシとワッシを一例ずつ使用しており、象使いはオレとワッシを併用している。ワッシは先行研究での言及はないが、ワッチの異表記とも考えられる。小松 (1987) ではワッチは下層女性が使用するとしており、階層の点では鈴木三吉の用例も小松の例と類似している。鈴木三吉では、社会階層が低く田舎者の男性であることがこの形式によって示されている。

〈ワシ〉

- (12) 「それは雀のいふとほりである。私 (わし)もさう思つてゐる。」(4-6「宇治の渡し」天皇→息子)
- (13) 「私 (わし)が今、こんなに王子の服を着て、こゝにかうしてゐるところを、あの貧乏人町のだれかゝ来て、のぞいて見たら、どんなにびつくりするだらう。」(14-4「乞食の王子」トム(乞食の子)の独言)
- (14) 「これから山奥の私 (わし)の姉——お前のをばさんのところへ行つて茸を貰つて来ておくれ。」(15-3宇野「優しい娘の話」意地の悪い継ばあさん→娘)

ワシは、鈴木三吉、その他の作家共に男性の使用が多く、中でも (12) のように一定の年齢以上の社会階層の高い人物の使用が目立った。王や神、仙人等は年代に関係なくワシを使用している場合が多く、(13) のように子供でも王子という地位に準じてワシを使用している例がみられる。したがって、金水 (2003) が述べているようにワシは老人語・博士語に含まれる役割語であり、この形式の使用によって年老いているこ

とや、知恵や権力を有した威厳ある人物であることが示されているといえる。

しかし女性が使用している場合には、年老いている人物であるという点では男性の使用と共通しているが、その他(14)のように性格や外見が悪いことが多い。女性の場合には知恵や権力を有した人物を示す博士語としては使用されておらず、年老いているだけでなく、負のイメージを持つ者に対して使用されている。

〈オレ〉

- (15)「それほど欲しいものなら俺(おれ)が買ってやろう。」(1-5「またばあ」王→家来)
- (16)「ロボツクンクルは決して人間には姿を見せたことがないといふ話だが、俺(おれ)が一つ見てやろう。」(6-1宇野「路の下の神様」怠け者で心の善くないクシベシの独言)
- (17)「ともかく、あんなものはおれのところに用事はない。」(7-5「地中の世界」兎→平五郎)

オレは、鈴木三重吉、その他の作家共に、(15)のように社会階層の高い人物から、(16)のような社会階層の低い人物、さらに(17)のような人以外の有情物や植物等、幅広く使用されている。性別が不明のものを除いて、全て男性が使用しており、小松(1987)が指摘する「同等もしくは目下に対して使用」されるような乱暴でくだけた形式として用いられている。

その他の作家では社会階層による用例数の違いはほぼみられなかったが、鈴木三重吉では、社会階層の高い人物の使用が中・下層の人物の使用に比べて多く、特に王や王子においてオレとワシ・ワタシを併用する例が多くみられた。金水(2003)の述べる「むき出しの闘志や野性味を持ったキャラクター」を表す形式としてオレが使用されているといえる。ワシによる知恵や権力、威厳の保持の表象と共に、オレによる力強さや男らしさの表象によって王や王子のキャラクターが成り立っているといえるだろう。

〈オイラ・オラ〉

- (18)「誰が代りをくれるんだ? 畑の葱を気をつけろ、おい等(ら)が又盗むぞ!」と歌ひはやしました。(15-1宇野「塔の上の畑」子供達 歌詞)
- (19)「俺(おら)あ、これ喰つて見せるが、どうだいお前は?」(13-3森田「鼠のお葬ひ」太吉→仙松(共に百姓の子))

オイラ、オラ共に宇野浩二、森田草平の作品でのみ使用されている。オイラは子供達がお爺さんを歌では

やし立てる時に用いられているが、これ以外に子供たちは一人称代名詞を使用しておらず、どのような形式として用いられているかの判別が難しい。

オラは、田舎の百姓の子供が使用しており、(19)に示した太吉、仙松共に一人称代名詞としてオラを使用している。この作品では「地球の裏側にとくべえや」「馬鹿こくねえ。そんなことがあるけえ」等、物語世界における「田舎言葉」が使用され、祁(2007)や金水(2007)の指摘にもあるように、オラは都市から離れた田舎のイメージと結びついて、社会階層の低い人物に使用されているといえる。『赤い鳥』ではこのように、物語世界における「田舎言葉」を全面的に使用している作品は珍しく、またオイラ、オラ共に使用頻度の低い形式である。

〈ボク〉

- (20)「だつてお母ちやま、分つてるでせう、ほら、ほく、ミスと一しよに出かけるとあき／＼してしまふの。」(22-1「青い顔かけの勇士」トゥロット→母)
- (21)「そんなもの、僕(ぼく)持つてやしない。」とついでためをいつてしまひました。(5-2有島武「一房の葡萄」語り手(小学生)→同級生)
- (22)「よく見てみてくれ給へよ。僕(ぼく)の使ふ魔術には、種も仕掛もないのだから。」(4-1芥川「魔術」語り手(私)→友人)
- (23)僕(ぼく)の生れたのは信州の軽井沢から四五里離れた××といふ田舎町の居酒屋だ。(18-4宇野「犬の「世の中」へ」語り手(犬)地)

ボクは鈴木三重吉では成人男性の使用はみられず⁹⁾、男の子しか使用していないという点に特徴がある。また社会階層の低い人物は使用しておらず、中・上層の少年が使用している。その他の作家では、(22)のように成人男性の使用や(23)のように人以外の有情物が使用している例がみられた。使用している人物の社会階層をみると、全階層で使用されており、特に上層での使用が多い点と、下層でも若干の使用がみられる点で、鈴木の使用とは異なっていた。先行研究で指摘されてきたように、ボクは男子学生の用語であるとされており、その他の作家では書生言葉の流れを汲む若い男性の語として位置づけられているといえる。

〈ヨ〉

- (24)日本皇帝陛下。予(よ)は予(よ)の部下の代将官、マツシユウ・シイ・ペリーを特派使節に任じ、この書を陛下に奉呈します。(9-6「日本を」

大統領が天皇に宛てた親書)

ヨは、「日本を」という作品において、米大統領が天皇陛下に宛てた親書の中でのみ使用されている。

〈ワレ・ワレワレ〉

- (25) 「おゝ、われ等(ら)が命なるパールの神よ。」
(16-1「火の中へ」ヘロー(学者の弟子)→神)
(26) 「われ△△に向つて不当の攻撃を加へたものは直ちに討ち懲らさなければならぬ。」(5-4「少年王」カール王→議員たち)

ワレ(ワレラ)は鈴木三重吉のみで使用されている用例である。単数形ワレは1例のみであり、他は全て(25)のようにワレラの形で、発話者を含む複数の人物を指して使用されている。

ワレワレは男性の使用が圧倒的に多く、中でも社会階層が高く、上に立つ人物が、公的な場で多く使用する。

5 考察と今後の課題

『赤い鳥』にみられる一人称代名詞の調査によって、以下の結果が得られた。

- 1) その他の作家に比べて鈴木三重吉が使用する形式はバリエーションが多く、特徴的である。特にアタクシ、アタチ、ワッシ、ヨ、ワレは鈴木三重吉のみにみられる形式であった。
- 2) 鈴木三重吉とその他の作家ではボクの使用に違いがある。その他の作家では少年の他に成人男性や人以外の有情物が使用しているが、鈴木三重吉では少年のみが使用している。
- 3) 鈴木三重吉では、オイラ、オラを使用しておらず、『赤い鳥』全体からみてもオイラ、オラの使用は非常に少ない。
- 4) 『赤い鳥』にみられる一人称代名詞と、現在共通語で使用されている一人称代名詞の使用法は概ね一致している。

1で述べたように、鈴木三重吉のみにみられる形式は複数あり、鈴木三重吉は多くの形式を使い分けることによって、キャラクターをより細かく分類し、描くキャラクターの幅を広げていたと考えられる。

2では、鈴木三重吉がボクを、非常に限定された人物が使用する形式としていることがわかる。小松(1998)によれば少年がボクを使用するようになったのは明治20年代以降のことであり、加藤(1981)は明治30年以降、丁寧な言葉と共に目上や初対面の人に対しても使用されるようになったとしていることから、

その他の作家での用いられ方は概ね先行研究の指摘に合致しているといえる。一方、前述したように文化庁が昭和27年に示した「これからの敬語」では、ボクは男子学生の用語であって、社会人になればワタシを使うよう教育上注意する必要があると述べられており、鈴木三重吉の用法はこれに先んじているとみることもできる。また、鈴木はオレやワシ、アタチ等、それぞれの形式を特定のキャラクターに使用させており、キャラクターの特徴を表す一つの指標としていると考えられることから、ボクを少年だけが使う形式にすることで、童話作品における少年を表す指標を作ったとも考えられる。

3について、『方言文法全国地図』6の341図によれば、オラやワシといった一人称代名詞は、現在でも西日本を中心とした地域で親しい人に対して使用されている。地域方言では、使用する一人称代名詞に性差の区別がない場合があることや、同資料338図に示されるように、丁寧な言葉遣いを求められる場面ではワタシの使用が多くなっていることを併せると、個人内でも一人称代名詞に対する位相の区別があり、それら各形式が児童文学においてキャラクターと結びついて使用されていると考えられる。『赤い鳥』で使用されているオイラ・オラは方言を背景として、田舎に住む社会階層の低い人物と結びついて使用されている。したがって、鈴木三重吉の作品でこれらの形式の使用がみられないのは、鈴木三吉の作品が中世ヨーロッパを想定したと思われる架空の世界が舞台となっているものが多いことが要因として挙げられるが、その他の作家の作品では、日本の農村を舞台とした作品も数多くみられる。先行研究によれば、少なくとも江戸から明治の初めにかけてはこれらの形式は頻繁に使用されていたはずであり、『赤い鳥』ではこの形式を使用しないという選択をしていたとも考えられる。

4について、『赤い鳥』ではすでに一人称代名詞が役割語として使用されており、それぞれの形式に付随するキャラクターも、現在の一人称代名詞の使用とほぼ変わらない。現在私たちが子供向けの作品で受容している、童話におけるそれぞれの一人称代名詞の形式とキャラクターとの結びつきは、『赤い鳥』ですでにほぼ出来上がっていたといえるだろう。しかし、『赤い鳥』は、前述したように鈴木三重吉の「子供のために手本となる良い雑誌を作りたい」という理念の基に作られており、児童文学の祖として、新しく手本となる慣習を創造したとも考えられる。

一人称代名詞における、現代共通語と『赤い鳥』との共通点・相違点が、『赤い鳥』独自のものであるのか、この時代にすでに慣習として出来上がっていたのかを

明らかにするためには、同時代の他の作品について同様の調査を行い、検討する必要がある。これを今後の課題とした。

【注】

- 1) 小松 (1987), 祁 (2007), 山西・山田 (2008) では、「自称詞」という用語が使用されているが、これは「一人称代名詞」と同義であるとみなし、本稿では後者の語に改めている。
- 2) これを飛田 (1974) は「話し手の体面」としている。
- 3) 連載作品の場合、「話数」は連載回ごとに、「作品数」は全話を通して、それぞれ1と数えている。
- 4) ただし、一部問題がある。4-2〈ワッシ〉を参照。
- 5) 表1では、地の文を示す「地」の列のない形式は、用例がないことを示している。表3も同様に、用例がない階層は行を省略した。
- 6) 性別の分類には、本文に記載されている男女の別や父母等の親族名、王・女王等の身分の他、挿絵の服装や髪形等を手掛かりとしている。
- 7) 用例は全て『赤い鳥』の本文から引用している。『赤い鳥』の本文は総ルビ表記であるが、本稿では取り上げる一人称代名詞が漢字表記の場合のみ、丸括弧を付してルビを示す。用例中の「／＼」は踊り字である。また、用例の後の丸括弧には(雑誌の巻号「作品名」話し手→聞き手)の順に記載している。鈴木三重吉以外の作品から用例を引用している場合には、作品名の前に作者名を記すこととする。
- 8) 表2の「有情物」は人以外の有情物を指している。表3も同様である。
- 9) 2-1「ゼメリイの馬鹿」でゼメリイが16例中1例だけボクを使用しているが、それ以外ではワシを1例、オレを14例使用しており、ボクの総用例数86例のうちの1例であることから、鈴木三重吉ではボクを少年が使用する形式と位置付けているとみなした。

【参考引用文献・URL】

- 加藤照美 (1981) 「明治期における「僕」の用法」『日本文学ノート』宮城学院女子大学日本文学会 50-61.
 北原保雄編 (2010) 『明鏡国語辞第二版』大修館書店
 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語役割語の謎』岩波書店
 金水敏編 (2007) 「近代日本マンガの言語」『役割語研

究の地平』くろしお出版 97-107.

- 祁福鼎 (2005) 「明治時代語における自称詞のスイッチングについて」『文化継承学論集』2号 61-70.
 祁福鼎 (2007) 「明治時代語における自称詞—その全体的様相—」『文学研究論集』26号 25-43.
 国立国語研究所編 (2006) 『方言文法全国地図 第6集』財務省印刷局
 小松寿雄 (1987) 「浮世風呂における女性の人称と階層」『近代語研究 第7集』武蔵野書院 405-419.
 小松寿雄 (1998) 「キミとボク—江戸東京語における対使用を中心に—」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院 667-685.
 小松寿雄 (1999) 「『吾輩ハ猫デアル』の一・二人称代名詞—明治東京知識層の言葉 (一)—」『近代語研究 第14集』武蔵野書院 265-276.
 小松寿雄 (2000) 「オレ・ソチ・ソナタ・ワッチ・ワタイ—明治東京語女性人称形成の一考察—」『国語語彙史の研究 第19集』和泉書院 1-16.
 小松寿雄 (2008) 「浮世風呂における人称の階層差と男女差」『近代語研究 第10集』武蔵野書院 171-186.
 柴田武編 (2005) 『新明解国語辞典第六版』三省堂
 長崎靖子 (2007) 「人称代名詞「僕」「君」の変遷」『川村学園女子大学研究紀要』18巻3号 131-146.
 西尾実他編 (2009) 『岩波国語辞典 第7版』岩波書店
 文化庁 (1952) 「これからの敬語 (建議)」
http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/joho/kakuki/01/tosin06/index.html
 飛田良文 (1974) 「明治初期作品の敬語」『明治大正の敬語 敬語講座5』明治書院 37-80.
 飛田良文 (1981) 「書生の敬語」『国文学』26巻2号 182-187.
 山西正子・山田繭子 (2008) 「「あたし」考」『目白大学人文学研究』4号 183-200.
 山田実樹 (2012) 「鈴木三重吉の童話作品における一人称代名詞」『論叢国語教育学』7号 37-47.

【資料】

- 『赤い鳥』復刻版 (1979) 日本近代文学館
 CD-ROM 版『赤い鳥』(2008) 大空社
 大空社 CD-ROM 版『赤い鳥』は、日本近代文学館『赤い鳥』復刻版を底本としてPDF化したものである。本稿の調査では主に『赤い鳥』復刻版を使用し、印字不明瞭等の場合には、PDF画像も併せて確認した。